

Vista 5 M3 / OnAir 3000 ユーザーレポート

株式会社エフエム福岡 様

Vista 5 M3-22F / OnAir 3000-18F

AスタジオとBスタジオをSTUDERで更新



株式会社エフエム福岡

技術部

生越 盛幸

更新の経緯

2008年の新社屋移転に伴い、5つのスタジオのうち3つ（A、B、Cスタジオ）は音声設備を移設しました。その移設した音声卓が導入から15年以上経過し、不具合も出始めてきたことから、周辺機器も含め2015年から3年計画で更新することとなり、まずはBスタジオから始めました。

Bスタジオ

Bスタジオは収録スタジオで、ワンマンでもコントロール・ルームとブースに分けても使用可能となっていました。そのため、DJからディレクターまで様々な人が使用し、またワンマン運用時でもゲストと対面して収録できるな

ど、非常にフレキシブルなスタジオでした。また番組制作に関わっているスタッフはおよそ60名もいて管理も煩雑になってしまうので、収録スタジオでは番組や個人のシーンなどは登録せず、技術があらかじめ設定しておいたイニシャルのシーンを使用前に呼び出して作業をしてもらっていました。

システム選定理由

前述のような、これまで行っていたこと全てが可能になることが必要最低条件でした。

OnAir 3000は、マイクがブース内にあるのかコントロール・ルーム内なのかを設定することにより、CRモニターなどの制御をしてくれるので、ワンマンとの切り替えが安易に行えました。さらに外部の制御インターフェースと連携して、ワンマン時にはコントロール・ルーム内の内線電話も切断することができました。またコントロールサーフェイスのレイアウト、組み合わせが自由ですので、ワンマン運用時でもゲストと対面して座った時のほどよい距離感が実現できました。

操作性・わかりやすさに関しては、技術的知識があまりない人が多く使用するので特に重視しました。フェーダーモジュール分のフェーダータッチスクリーンを設置することにより、や

りたいことを視覚的・直感的に操作でき、ワンマンやイニシャルのシーンも、ユーティリティ・パネルに設けたボタンを押すことで簡単に呼び出せること等がポイントになりました。

今回の更新で、弊社としては初のスチューダー社のデジタル卓の導入となりましたが、OnAirシリーズは国内の放送局への多くの導入実績があり、安心して導入を決めることができました。

運用について

更新直後は新しいスタジオを使用するのが怖いのか、他のスタジオと比べると若干使用率は低かったのですが、1年経った今では、更新前と変わらない使用率となっています。また、使い方の質問やトラブルなどによる技術の呼び出しも少なく、安定した、使いやすいスタジオだと改めて実感しております。





Aスタジオ

3年計画の2年目となった2016年は、生放送と収録で使用しているAスタジオを更新しました。およそ1年前に収録で使用しているBスタジオをOnAir 3000で更新したこともあり、AスタジオもOnAir 3000で検討し、打ち合わせを進めていました。このスタジオは、i-dioのQリーグチャンネルの生放送スタジオとしても使用しています。i-dioとはハイレゾ級音質の放送も可能な新しい放送サービスで、2016年3月から全国で放送を順次開始中です。この度、急遽、Aスタジオをハイレゾ仕様にする事になり、48kHzまで対応のOnAir 3000ではなく、96kHzにも対応しているVISTA 5M3で更新することになりました。

同期について

エフエム福岡マスターからは48kHzのワード・クロックをもらっていますが、i-dioマスター



へは96kHzで送らないといけないという問題が当然起こります。当初は使用する時にコンフィグを変更して運用することを検討しましたが、戻し忘れてエフエム福岡の放送で事故を起こすリスクも大きいので、別の方法で運用を行うことにしました。まずVISTA 5はインターナルで常時96kHz動作させます。エフエム福岡マスターからきたワード・クロックは一旦TASCAM CG-2000で受け、CG-2000の同期信号出力を周辺機器とVISTA 5のAES/EBU I/O with SFCカードに入力しました。同カードは、入力された同期に追従したデジタル信号を出力してくれるため、エフエム福岡マスターや周辺機器は48kHz、i-dioマスターや96kHz対応の周辺機器には96kHzでシステムを組むことができました。

その他

以前のAスタジオは、EMG機能が整っていなかったため、今回の更新を機にEMG卓を設置しました。また本社にはワンマンスタジオが2つしかありませんでしたので、ワンマンオペレートでも収録を行えるようにして、スタジオ全体を効率よく、様々な形態で使用できるように改善しました。

96kHz仕様のラジオスタジオ

ラジオの生放送スタジオでハイレゾ対応というのは全国的にも非常に珍しいものだと思います。i-dioのQリーグチャンネルでのハイレゾ級音質の放送にはもう少し時間がかかりますが、今後このスタジオを通してより良い音質の放送をリスナーに届けていきたいと思っています。

最後に

以上、BそしてAスタジオと2年連続でスチューダーでの更新となりました。Bスタジオの通常運用/ワンマン運用の両立、Aスタジオの急な卓の変更や、ハイレゾ仕様というラジオ局ではあまり例のないスタジオにもかかわらず、柔軟に対応し、親身になって相談に乗っていただいたスチューダー・ジャパン・ブロードキャスト様、テクト様、日本音響エンジニアリング様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

